

新入生が考える保育者の資質について

The Freshman's Awareness of Abilities and the Qualities of Childcare Training

林 悠子
Yuko HAYASHI

要旨

教育学部に入学し幼児教育を志す新入生は、入学時に幼児教育や保育についてどのように考えているのであろうか。本研究では学生それぞれが思う「保育者として必要な力」について、また保育者の適性と言われる6つの資質について、自身がどの資質を最も重要だと思ひ、また現時点でどの資質を身につけていると思うかについて尋ねた。その結果、学生らは「コミュニケーション能力」「子どもを理解すること」「何事にも一生懸命であること」「笑顔」が保育者として必要であるとしていた。また、これらを含む保育者適性については「論理的思考性」や「行動力」よりも「養育性」「共感性」を重視する者が多かった。自分に身につけているとするものは「共感性」「気配り」とする者が多く、「論理的思考性」「養育性」とする者は少なかった。4年間の専門教育を通して何を必要とするか、何が身につけていくのか、当然変化をしていくものではあるが、最初の段階で保育者に必要な力を意識させて学びに向かわせることが重要であり、また、身につけているか否かを考えることで自身の資質について確認し、意識的で効果的な学びへ繋がるものと考えられる。

キーワード：保育者の資質、教育者、保育者、保育者適性

I. はじめに

これまで、保育現場が実習生や新人保育者に何を望んでいるのか、短期大学幼児教育学科の学生らが保育者の能力についてどのように考えているのか、保育者としての資質や実践力について、研究を重ねてきた^{1) 2) 3)}。筆者が現在所属する本学人間教育学部には、幼稚園・小学校・中等国語・中等音楽・中等数学の5つの専修があり、幼稚園専修に所属する学生は幼稚園教諭一種免許状や保育士資格の取得を目指して幼児教育や保育を中心とした専門教育を学んでいるが、小学校教諭一種免許状または特別支援学校教諭一種免許状も合わせて取得が可能である。このように幼稚園から小学校、中学校、特別支援の免許状まで各学校段階の専門知識を学び、各専修の枠に捉われず発達の繋がりを知り幅広い知識の獲得が可能であるとともにその修得が求められる。そのため、専門科目の中にも他専修と同一科目名で一部共通した内容で進められる科目があり、その一つが1年次に開講される専門教育科目「人間教育実践力開発演習Ⅰ」である。幼稚園専修の学生は小学校専修や中等国語専修の学生らとともに横断的な授業を受講する中で、幼稚園教育だけでなくその先の教育段階や特別支援教育などについても深く学ぶことができる。平成29年告示幼稚園教育要領⁴⁾前文には「…家庭との緊密な連携の下、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら…」とあり、第1章総則の第2には、生きる力の基礎として幼稚園教育の基本を踏

まえて一体的に育みたい資質・能力を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として整理し、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続をより一層図るよう努めるものとしている。また、平成29年告示小学校学習指導要領⁵⁾前文には「…幼児期の教育の基礎の上に、中学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら…」とあり、いずれも教育の一本化がより強く求められる内容となっている。そのため、各専門性を踏まえつつ学校段階における発達の繋がりを持って専修横断的に教育や教師という職について学ぶ本講義は非常に意義深いものである。そこで本研究は、幼児教育を志して入学し専門的な学びを始める前段階にある新入生が、保育者に必要な力や保育者の資質についてどのように考えているのか明らかにすることを目的とした。

II. 方法

(1) 調査対象と回答の属性

対象はX大学人間教育学部幼稚園専修1年次に所属する大学生20名であった(男子3名、女子17名)。

(2) 調査内容

「あなたが今思う『保育者として必要な力』とは何か」について、「人間教育実践力開発演習I」の講義1回目に見学した。本講義は1年次に開講される通年科目であり、「保育者に求められる資質・能力を身につけるために必要なコミュニケーション力、企画力、行動力などの人間力を高めていくことの必要性を知る。人間教育実践力を高めるために、地域園へ行事参加やボランティアなど通してつながりを模索し、それらの活動を園のニーズに応じてグループで計画、運営していく。」ことを授業の目標とするものである。実際に幼児教育・保育現場に出向いて保育者の立場で初めて子どもと触れ合いながら保育者の仕事を間近に観察し、保育者の職に就くまでに何を学ばなければならないのか、また何を身につけなければならないのかなど、グループ討議を繰り返しその成果を交流し合う、フィールドワークを中核とする授業である。そして、「園等での実践的な経験を通じて幼児教育・保育に関する理解を深める。園児との関わり方を実践的に学び、各自の課題を明確にする。幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め、課題解決に向けての見通しを持つ。グループによる協同学習とその成果等の発表活動を積極的に行うことによって、自身の学びをふりかえり省察力を高める。」ことを1年間の学習の到達目標としている。幼稚園専修、小学校専修、中等国語専修で開講される科目であるが、オリエンテーションや現役教諭の講演、実際に学校支援ボランティアとして教育現場を体験している2年次生の報告を聞くなどの合同で開催される授業回を通して、各専門以外の学校段階についても知り、教師の役割の違いや共通とする部分などについて広く理解することができる実践的な授業である。

第1回目の講義では本科目の概要について詳しく説明を行ったのち、「あなたが今思う『保育者として必要な力』とは何か」として、入学後間もない新入生が考える保育者に必要な力について記述を求めた。

また、第2回目の講義において、幼稚園・保育所・こども園の違いや保育者の役割について触れ、「保育者適性」についても説明を行った。「保育者適性」について多くの研究があるが、ここでは青戸⁶⁾が保育・教育者の適性尺度の検討を行った中で抽出された6因子「共感性(人の気持ちに寄り添うことができるか)」「行動力(実際に考えたことを行動に起こすことができるか)」「養育性(子どもに対する正しい知識と理解を持って子どもの成長の手助けができるか)」「気配り(気持ちの部分を理解することができるか)」「社交性(人との基本的な関わりができるか)」「論理的思考性(論理的に物事を考え計画性があるか)」について、「1. あなたが重視する順に並べてください。1番目にしたものについてその理由を教えてください」「2. あなたに身につけていると思う順に並べてください。6番目にしたものについて、これからそれをどうやって身につけていきますか」として、順位付けをし、その理由等の記述を求めた。

(3) 調査時期と調査方法

「保育者に必要な力」については第1回目講義の確認課題として記入用紙を配付し、講義後に記入と提出を求めた。「保育者適性」については第2回目の講義の中で説明を行いながら記入を求め、一斉調査を行った。なお、新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言中であったため、調査時の講義は対面で行われず、ビデオをオンにした状態でのオンライン授業であった。

(4) 倫理的配慮

本調査の回答や考え方が授業等における学生本人の利害に触れないこと、プライバシーに配慮し、結果は個人が特定される形では扱われないことなど、倫理的配慮について口頭にて説明を行った。

Ⅲ. 結果

(1) 学生らが思う「保育者として必要な力」

学生らの思う「保育者として必要な力」とそれを必要と感じた理由について、表1に示した。「笑顔・表情」(5)、「何事にも一生懸命であること」「子どもを理解すること」(4)、「コミュニケーション能力」「視野の広さ」(3)、「周りを見る力」「信頼関係を築く」「寄り添う力」(2)、「観察力」「誰にでも好かれる力」「子どもを楽しませる力」「子どもをまとめる力」「洞察力」「対応力」「努力」など、15の資質が挙げられた。なお、自由記述で求めたため言葉が完全に一致するものではなく、また、学生によっては2つ挙げている者もいたため、回答の数と人数とは一致しない。

表1 あなたが今思う『保育者として必要な力』とは何か

笑顔・表情 (5)	私が思う保育者として必要な事は「 <u>笑顔を絶やさない事</u> 」です。その理由は、保育者が常に笑顔でいれば自然と子供達も笑顔になってくれると思うからです。子供達の中には元気の無い子や不安を抱えている子もいるかもしれません。そういう子供達を笑顔にしてあげるのも保育者としての仕事だと思っています。たくさんの物事を教えてあげることも必要な仕事のひとつだと思いますが毎日笑顔で接してあげることが何よりも大切だと思っています。保育者が笑顔を絶やさず接する事で1人でも多くの子供達が明るく笑顔になってくれたら保育者側も元気を貰えると思います。私は将来笑顔を絶やさずたくさんの子供達を笑顔にできる先生になりたいと思います。
	私は、保育者として必要な力だと思うこと、 <u>どんな時でも明るく笑顔でいること</u> です。笑顔でいるということは、こども達の前に立つ教育者として当たり前なことだと私は思います。それに私が通っていた幼稚園の先生は、いつも笑顔でこども達に接していたので、私もそんな風になれるよう常日頃から笑顔でいるようにと心がけています。
	一番は、自然な笑顔だと思います。大人でもムスッとした表情やしなめ面をしている人よりも、にこにここと笑っている人や優しそうなきみを浮かべている人の方が話しかけやすいので保育者として一番必要なのは、笑顔だと思います。自然なというのは、子どもは人の感情に敏感に反応するという話を聞いたことがあるので、作り笑いではなく自然とでた表情がいいと考えたからです。
	他にも言葉遣いや表情なども重要だと思います。どんな言葉をかけてあげるかでも子どもたちが感じる部分が違うのではないかと考えます。表情も言葉と一緒にどんな表情でいるかによって受け取る側が思うことが変わってくると思います。怒っている顔より笑っている方がどちらも良い影響をもたらすと思います。
	大切だと思うのは、 <u>笑顔</u> だと思います。嫌そうな顔や怒った顔で話しかけられて嬉しい人は、いないと思います。一緒に働く先生、保護者そして子どもたちにも明るい表情で接することで、お互いの気持ちが伝わりやすくなると思います。だから、保育者として『常に笑顔』でいることがとても大切なことだと思います。
子どもの理解 (4)	子どもの気持ちを理解してあげる能力です。この子どもの気持ちを理解してあげるためには、子どもが好きというのが第一の条件だと思います。これがないと子どもたちの面倒を見ることは続かないと思います。子どもは、自分たちの予想外の行動や言動をとると思うので、それにイラついたりしてしまうと、子どもたちのために仕事ができないと思います。
	大事だと思うのは、 <u>子どもの心にくみとること</u> だと思います。子どもたちはまだ自分の感情を上手に表現できないので、くみとった感情を表に出しやすいように手伝ってあげるのも仕事だと思います。
	私が、保育者として必要だと思う力は、「 <u>子どもの気持ちや求めることを上手に受け入れる</u> 」ことです。何でもかんでも否定などしてしまったりすると、子どもの成長を妨げてしまう可能性があるからです。ですが、全て子どもの言うとおりに行動するというものではありません。子どもの気持ちを受け入れつつ、やっていいこと、やってはいけないことを教えていく必要があります。
	<u>子供の気持ちなどをしっかり受け止めてあげること</u> 子供の気持ちを受け入れつつもやっても良いこと、やっては悪いことをきちんと教えてあげる。また何故それをやっては悪いのか理由も教えてあげる。

<p>何事にも一生懸命に取り組む力 (4)</p>	<p>保育者として必要な力について、私は何事にも一生懸命に取り組む力が必要だと考える。理由は、先生が一生懸命に何かに取り組んでいると、子どもたちにも必ず伝わると言うことを、実際に見て感じたからだ。私がアルバイトをしている保育園では、リズムと言う音楽に合わせて体を動かす時間がある。正直、私が入っていたクラスの0～2歳児には少し難しいのではないかと考えていたが、子どもたちは一緒に取り組んでいる保育士の周りに集まり、一生懸命に体を動かして楽しんでいた。それを見て、単に保育士が指示をして手本を示すだけでなく、子どもたちと同じ気持ちになって同じことを一生懸命に取り組むことにより、しっかりと伝えることができ、一緒に楽しむことができるのではないだろうかと感じた。</p> <p>この経験から、保育者として、何事にも一生懸命に取り組む力が必要であると考えます。</p> <p>私が、保育者として必要だと思う力は、「何事に対しても一生懸命に取り組む、接する」ことです。褒めるとき、叱るとき、遊んだりする際など、日常生活で子どものことを第一に考え、真剣に接していくことはとても重要なことです。何事も中途半端にすればそれを見た子どもたちに対して、いい印象を与えないと思います。なので、何事にも全力で、遊ぶ時など子どもたち以上に心から楽しんで遊べば子どもたちはそんな保育者ともっと遊びたいと、一緒にいたいと思ってくれると思うからです。</p> <p>私が思う保育者として必要な力は、何事にも一生懸命に接することができる力だと思います。褒めるとき、叱るとき、遊ぶときは常に子どもたちのことを真剣に考え接することが必要で、先生が子どもと遊ぶ場合は、子ども達よりも楽しむことで、より一緒に楽しむことができ、「心から遊びたい」と思ってくれるようになると思うからです。何でも自分が楽しまなければ相手にも伝わらないと思うので一生懸命になることは大切なことと感じます。</p> <p>・何事に対しても一生懸命に接すること 遊ぶときは子供以上に子供になって遊ぶ。子供だからと言って馬鹿にせずに、何か悩んでいる時は同じ目線に立ってあげ一緒に考えてあげる。</p>
<p>視野の広さ (4)</p>	<p>私が保育者として必要となる力は視野の広さです。視野が広ければ1人の子どもだけを集中して見るのではなく、全体的に子どもを見れ、もし危ないことがあってもすぐに気づけると思います。そして何より視野が広ければ心に余裕ができるのではないかと考えます。</p> <p>私は、保育者として必要な力だと思うことは、視野を広くもって行動するという事です。こども達が今何をしているか、こども達同士でトラブルはないか、ケガをした子や体調不良の子はいないかなど視野を広くもつことが大事なことだと思います。その事態にいち早く気付いて行動するというそんな力が私には必要だと思いました。</p> <p>私は保育者として必要な力がたくさんある中で「視野の広さ」だと思っています。子どもが怪我無く安全に過ごせるようにしなければいけないと思っています。例えば、子どもが遊んだりしている際、子どもに怪我などがないように気を配らないといけません。保育者が少しでも気を抜いてしまうと大きな事故に繋がるかもしれません。そのようなことが起こらないために視野を広げ責任感を常に持たなければいけないと私は思っています。</p> <p>広い視野を持っていることです。保育者は、たくさんの子どもの動きを常に把握しておくことが求められていると思います。目の前の子どもしか目に入らなくなると、ほかの子どもを平等に見ることができなと思います。目の前の子どもと真摯に向き合うことは大切だと思いますが、離れた子供にも視野を向けることが大事だと感じました。</p>
<p>コミュニケーション能力 (3)</p>	<p>私が思う保育者として必要な力は、コミュニケーション能力だと思います。子どもたちや保護者、地域の方々などと話すことがたくさんあると思います。コミュニケーション能力がなかったら、うまく話すこともできないし、幼稚園や保育園での状況を保護者に伝えられないと思います。なので、コミュニケーションはとても大切だと思います。</p> <p>私が思う保育者として必要な力は、コミュニケーション能力だと思います。はじめて会って、子どもと距離を縮めるためにまず大切なのは、コミュニケーションをとって心を開いてもらうことだと思います。なので、子どもたちと上手く楽しく話すためにもコミュニケーション能力が必要だと思います。また、保護者と上手く付き合っていくためにもコミュニケーション能力は必要になってくると思います。</p> <p>・コミュニケーション能力 子供とのコミュニケーションだけでなく、職員さん、そして子供を預かる以上は必須の保護者さんとの連携も必要。</p>
<p>周りを見る力 (2)</p>	<p>私が保育者として必要だと思う力は周りを見る力だと思います。どこで誰が何をしているかだけでなくどんな意図があってその行動をしているかを見抜くことができ初めて子どもの行動の裏にある意図が見えてくると考えます。なので、子どもの成長に必要な事であるかを見極めるためだけでなく、子どもの真の理解のためにも普段から周りを見て成長段階にある行動だと判断する必要があると思います。誤った判断で子どもたちの成長を止めてしまわないためにも周りを見る力を身につける必要があり、そのために必要なことは視野の拡大だと思います。日常生活の家族の観察や近くの自然観察などからも始められると思うので身近なところから積み重ねていきたいと思っています。</p> <p>私が思う保育者として必要な力は周りが見える力だと思います。理由は、まず周りが見えていないと子どもたちや保護者、同じ職場の人が困っていることに気付かずいち早く行動がとれないということになります。子どもを預かる以上ひとりひとりの様子をちゃんと見て体調の変化やちょっとした変化に気付かないといけないと思うので周りが見える力が必要だと思います。</p>
<p>信頼関係を築く (2)</p>	<p>私が思う保育者として必要な力は信頼関係をうまく築いていく力だと思います。子どもとの信頼関係だけではなく、同じ職場の人、保護者との信頼関係も大切だと思います。信頼関係がなければ保護者は安心して子どもを預けられず、子どもは話しやすい環境が作れず、それぞれの子どもの様子を把握できないということが起こるので信頼関係を築く力が重要だと思います。</p> <p>私が保育者として必要となる力は信頼を得ることだと思います。なぜなら信頼のない先生には保護者の方も子どもを預けたいとは思わないのでしょうか。子どもも先生に安心感を持たず心を開けないと思います。信頼を得れば子どもたちとより近くでかかわれるし、保護者も安心できると思います。</p>
<p>寄り添う力 (2)</p>	<p>私は子ども一人ひとりに寄り添う力が必要だと思います。私は子どものとき人見知りや激しく先生や友達に話しかけることが苦手でした。一人でいる時は先生に気付いてもらえるまで待つ癖がついてしまい、今でも自分から誰かに声をかけることは苦手です。自分の意見を言えず人より損をすることが多かったため、私が保育者になった時は子どもたちが意見を言える場を作り、一人ひとりに寄り添っていききたいです。私のように大学の授業で発言するときに困るような思いを未来の子どもたちにさせたくないので、小さい頃から意見を伝えることに楽しみを感じられるような育み方を大学で学びたいです。</p>

寄り添う力 (2)	子供の気持ちに寄り添おうとする力だと思います。私の保育者のイメージはとても子供に慕われているということです。手遊びや外遊びを一緒にやったり、歌を歌ったり、何かを練習したり、また、ダメなことはきちんと注意する、何をすることも先生の存在や、声掛けがあるのだろうなと思いました。そしてなぜかと考えた時にこの力ではないかと思いました。寄り添うことで、その子の特徴をより早くつかめたり、心をひらいてくれたりするのかなと思います。そうすることで子供との距離も縮まりよりいい関係が築けます。だから私はいい保育者、人間になるためにも今から周りの人の気持ちを考えたり、尊重したりすることを大切にしていきたいです。
観察力	私が思う保育者として必要な力は観察力だと思う。子どもの行動を見て気持ちを読み取ることができないと表には出さない本当の気持ちが分からないままになってしまう。日頃から幼児の表情や行動をよく見て接することが必要であると思う。また、子どもに対してだけでなく例えば、先輩の先生方の良いところを観察し自分に生かしたり、行事や園での出来事も観察し改善することもできる。そして、ただ観察するだけでなく、視野を広くして物事を見ることが大切だと思う。他の人が気付かないようなことに気付くことのできる保育者になっていきたい。他にも保育者として必要な力はあると思うが、私は観察力がより必要なのではないかなと思う。今後の保育の学びで他に必要な力を身につけたいと思う。
洞察力	私は保育者として必要な力がたくさんある中で一つは「洞察力」だと思っています。保育者は子どもを預かる仕事なので、保護者の方から命を託される大切な仕事になります。なので、子ども一人ひとりの汗を多くかいているなどちょっとした体調の変化などに気づき保護者の方に今日の様子などすぐ報告できるようにするために洞察力は必要だと思います。
子どもを楽しませる力	私が思う保育者として必要な力とは子供を楽しませる力だと思います。それはただ遊びをするだけとか、絵本を読むだけではありません。笑顔や明るい雰囲気です。それは子供が関わりやすい雰囲気と言い換えることもできるでしょう。そうした力を持って子供を楽しませるにより新たな発見や意外な一面などを見つけられるかもしれません。そうすることで子供の長所を伸ばしたりして子供の成長につながるのではないのでしょうか。何事も楽しめないという意味がないと思います。楽しむことこそがその遊びの意図がわかるといいます。雰囲気から全て子供にとって親しみやすい性格にすべきだと思います。
子どもをまとめる力	私が思う保育者として必要な力は、子どもをまとめる力だと思います。3歳から5歳の子はまだ自分勝手にやりたいことをする子が多いと思うので、そんな子どもたちをまとめたり言うことを聞かせたりすることができるようになることも保育者には必要な力だと思います。
誰にでも好かれる力	私が思う教育者として必要な力とは誰にでも好かれる力だと思います。生徒だけでなく保護者さんや同じ教育者からも好かれる力が必要だと思います。生徒から好かれるという事はもちろん相談されることもあると思います。それに答えるのは大変だと思います。でもその相談に答えるのが教育者として当たり前だと思います。生徒に好かれると親御さんも安心して先生に預けられますし、みんなに好かれるという事はあまり人と接するのが苦手な生徒も近づきやすくなると思います。何より自分自身も教育者として自信も出てきますし、教育者という仕事が楽しくなると思うので、私は教育者として必要な力は誰にでも好かれる力だと思います。
努力	努力です。なぜ努力が必要かという、先生が自信なくピアノの伴奏や、子どもたちと歌ったり遊んだりしていたら、子どもたちも不安になっていきます。自信がなければ少しでもひきつった顔になってしまい、自分に余裕がなければ怒ることが多くなると思います。なので、自信や余裕をもって笑顔で子どもたちと接するためにも、努力が必要です。
対応力	対応力です。今日、毎日情報番組で取り上げられている新型コロナウイルスで、現在の保育者は、このような状況だけではなく様々なところで柔軟に対応しています。子どもたちだけでなく、保護者や先生と上手にコミュニケーションをとるためにも、対応力は必要だと思います。

(2) 「保育者適性」のうち最も重視するものとその理由

「保育者適性」のうち最も重視するものから順に並べその理由について尋ねたものを表2ならびに表3に示す。1位に挙げたものが多かったのは「養育性」(7)、2位は「共感性」「社交性」(6)、3位は「気配り」(7)、4位は「養育性」(6)、5位は「行動力」(7)、6位は「論理的思考性」(14)であった。最も重視するものについては分散しているものの、下位におかれたものとしては「論理的思考性」が最多であった。

表2 保育者適性について重視する順

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
共感性	3	6	1	3	5	2
行動力	3	1	5	2	7	2
養育性	7	2	3	6	2	0
気配り	2	4	7	4	1	2
社交性	4	6	3	5	2	0
論理的思考性	1	1	1	0	3	14

表3 1位「重視する」とした項目の理由とその数

養育性 (7)	まず子どもに関する知識がなければ保育者として何も手助けができない。例え他の能力が優れていたとしても正しい知識がないと正しい教育ができない。子どもたちに平等に教育を与えたとともに、様々な体験を偏りなく施すためにも知識は必ず必要になり、必ずしも裏付けのある確かな情報でなくてはいけない。 子どもについてしっかりと知識をつけて成長を正しい方法で支えていかないと子どもにしっかりと年齢にあった教育をできない。 子どもの気持ちを受け入れてあげたくても、子どもに対する知識と理解を持っていないと受け入れることが難しい。 保育者として一人一人の子どもを理解してあげることは信頼に繋がり、子どもの成長を少しでも手助けすることでその子の良さや可能性がより広がる。
社交性 (4)	子どもの教育をよくするためには、同じ保育者と相談をして考えることが重要になる。また、保護者との信頼関係を深めるためにも、基本的な人との関わりは必要である。 まず子どもと仲良くなるには、子ども達と会話をして心を開いてもらう必要がある。 社交性がないと子どもから関わってくれるのを待つだけになってしまう。
共感性 (3)	子どものことを第一に考え、気持ちに寄り添うことは保育者として一番大事である。 子どもと寄り添い信頼関係を築くことは子どもとの関わりの中核となる。 子どもと良い関係を築くことができ信頼関係を持つことにもつながる。また自分自身が人の気持ちに寄り添うことができ子どもに接していると、それを子どもがまねをして心優しい子に育つと思う。
行動力 (3)	養育性や社交性などは身につけていたとしても行動に移さなければ意味がない。また、予想外なことや、思わぬ事故が起きた場合にもそれに対応できる行動力があればなにも怖くない。 先生は子どもより先に行動することでお手本を見せてあげることができ、子ども達もそれを見て学び、次から1人でも行動できるようになる。
気配り (2)	相手の気持ちを考えなければ共感したり、行動に移したりすることができない。 気持ちを理解することができなければその人の気持ちに寄り添うことはできないと思うし、信頼してもらえとも思えない。
論理的思考性 (1)	すぐに行動することも大事だと思うが、保育者は子どもたちの命を預かっているから論理的に物事を考え計画をたて行動しなければいけない。

(3) 「保育者適性」のうち身につけているもの

「保育者適性」のうち、今の自分に身につけているものから順に並べ、6位になったものについて、その理由やそれを身につけるためにはどうすれば良いかを尋ねたものを表4ならびに表5に示す。1位に挙げたものが多かったのは「共感性」(8)、「社交性」(7)、2位は「気配り」(8)、3位は「行動力」(7)、4位は「行動力」(6)、5位は「養育性」(9)、「論理的思考性」(8)、6位は「養育性」(9)、「論理的思考性」(8)であった。身につけているものについては分散しているものの、身につけていないものは「養育性」「論理的思考性」が二分していた。

表4 保育者適性について最も身につけているとする順

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
共感性	8	5	3	4	0	0
行動力	1	3	7	6	3	0
養育性	0	0	0	2	9	9
気配り	4	8	5	3	0	0
社交性	7	4	4	2	0	3
論理的思考性	0	0	1	3	8	8

表5 6位「最も身につけていない」とした項目を身につけるためにどうするか

	「最も身につけていない」とした項目を身につけるためには	「身につけていない」という理由
養育性 (9)	授業に積極的に取り組み知識を増やしていきたい。そして、実習などで実際に子どもと接することで、座学では学べないような言葉遣いや環境の違いなどを学んでいきたい。また学校だけでなく近所の子ども達と関わったり子どもとよく関わるアルバイトなどを通して身につけていこうと思う。 大学の授業で子どものことをしっかりと理論的に学び、学んだことを教育実習などで実際に子どもと触れ合って養育性を身につけていく。 この4年間でしっかりと学び、その知識をただの知識にせず、実際にやってみて自分のものにしていきたい。	まだ教育について深く学んでおらず、専門的な知識が身につけていない。 まだ大学に入りたてで、保育者としての勉強を始めたばかりで、保育者として指導できる力がない

<p>論理的思考性 (8)</p>	<p>論理的思考を身につけるために実践記録をたくさん読み、ある程度のパターンを学ぶだけでなく、自ら行動して体験していくことが最も効果的で論理的思考が身につくと思う。また一時の感情に流されず感情を抑制し周りを見ることも思考を整理するために必要になる。先のことをちゃんと考えて、計画していくことを当たり前にしていく。 思いついたことをすぐに行動に起こして物事を進めるのではなく、順序をたてて物事を考え計画性のある行動を常に心掛けるようにしたい。 論理的思考の基本ルールを学んでいく。まだ分からないことが沢山あったり考えが偏ってしまっているところがあるのでこれからたくさん勉強して多方面の考え方を育てるようにしたい。 日頃から何をやる時でも計画性をもって行動するようにしていく。</p>	<p>つい感情のまま行動を起こしてしまふことがあり、よくない結果を招くことがあるので、論理的思考性を身につける必要がある。 感覚で行動することが多い。</p>
<p>社交性 (3)</p>	<p>社交性を身につけるとは人の考えを知ることだと思うので、大学の授業に真剣に取り組み同じ授業を受けている人や先生方の考えをたくさん取り入れていきたい。これからは積極的に人と関わるようにし、少しずつでもいいので自然に人と接することができるようになっていきたい。 積極性をもって自分からほかの人たちに話しかける。自分の考えに自信をもって話せるようにする。</p>	<p>最低限の人との関わることはできるが、人と積極的に関わるのが苦手だから。</p>

IV. 考察

本研究では、幼児教育を志して入学した新入生が専門的な学びを始める前段階において、保育者に必要な力や保育者の資質についてどのように考えているのかを明らかにすることを目的とした。

学生の思う「保育者として必要な力」には、「何事にも一生懸命であること」「笑顔・表情」「子どもを理解すること」「コミュニケーション能力」「視野の広さ」「周りを見る力」「信頼関係を築く」「寄り添う力」など、自由記述で求めたため言葉が完全に一致するものではないが、15の資質が挙げられた。これらを大別すると「観察力」「周りを見る力」「視野の広さ」といった「見る力」、「コミュニケーション能力」「信頼関係を築く」「誰にでも好かれる」といった「関わる力」、「寄り添う力」「子どもの理解」「子どもを楽しませる力」「子どもをまとめる力」「洞察力」「対応力」といった「子どもに向き合う力」、「笑顔・表情」「何事にも一生懸命であること」「努力」といった「保育者のあり方」になるであろう。学生の中には、兄姉の子どもとともに暮らしていたり、高校時代に保育コースに在籍するなど、子どもと関わった経験が多い者もいる一方、まったく子どもと関わってこなかった者もいる。そのような中でも、これらを挙げた理由についての記述を見ると、それぞれに子どもの姿とその子どもらに対してどう関わるのかというイメージを自分なりに持っているのがよくわかる。また、入学や志望の動機として「子どもが好き」「かわいい」といった情緒的な理由がよく挙げられるが、こうした記述は見当たらず、子どもへの愛情があることは前提として、「保育者に必要な力」とは感情に根差したのではなくきちんと子どもを理解し養育しようとする姿勢であり専門性であると意識していることが感じられた。

また、先行研究にある保育者適性として捉えられる6つの適性について、自分が最も重視する順に順位付けを行わせたところ、「養育性」「共感性」「社交性」が上位になった。「養育性」を重視する理由として、保育・教育者としての専門性に関わる基本的な知識理解の部分であり、まずはこの知識がなければ保育ができないと考えているためである。保育者適性尺度の検討を行った藤村⁷⁾や青戸⁸⁾も、養育性は保育者適性に欠くことのできない要因であるとしている。「共感性」については、人の気持ちに寄り添うことであるが、特に子どもらの気持ちを読み取り寄り添うことで信頼関係が築かれると考えているためである。また、「社交性」については、人との基本的な関わりができるかということであるが、子どもだけでなく、共に働く保育者同士や保護者との関わりも必要であると考えているためである。

今現在の自分に身についていると思われる順に順位付けを行わせたところ、「共感性」「気配り」が上位になり、「養育性」「論理的思考性」が下位となった。「養育性」が身につけていない理由として、これは先に述べたように専門的な知識理解であり、入学したばかりの自分たちには専門的知識が身につけておらず、保育者として指導がで

きないという自覚があると考えている。そのため、今後は大学の講義を大切にしっかりと知識を身につけるとともに、教育実習だけでなくアルバイト等を通して子どもと実践的に関わる機会を増やすことで養育性を身につけていきたいと考えている。「論理的思考性」については、ここでは論理的に物事を考え、計画性を持って物事を進めることなどを指し、保育の現場では年間の見通しを持ちながら指導計画を立て、円滑に日々の保育や行事を進めていくことである。しかし学生らはまず言葉の響きとして難しく捉え、深く考えたりそれに従って計画的に行動することが足りないと感じているようである。大学での学びは高校までの学びと異なり、指定教科書があるわけではなく、比較的自由な時間ができた中で自ら時間配分を決定し、まさに論理的に思考しながら課題と向き合い、能動的に自身の学びを深めることが求められる。論理的思考性が必要な適性でありながら他の適性に比べて重視されていなかったが、自身に身につけていないことを自覚することで、これまでの学習スタイルから脱して大学での学習スタイルとなっていく第一歩となるであろう。

学生らが今現在考える必要な力や保育者適性であるが、当然ながら、学年が上がって専門教育が増え、実習を経験していくことで変化することが知られている。実習経験もある2年生の方が現実に向き合うことで、学びの浅い1年生よりも保育実践力に対する自己評価が低く、保育者の資質に対する自己評価が高く、また重視する実践力や資質に違いがみられた³⁾。また、浅井⁸⁾は実習の前後で学生が持つ子どものイメージや保育士像が変化していることをテキスト分析から明らかにしている。今後は、入学時に持っている保育者への意識がどのように変化していくのか注目したい。例えば2年次、3年次と学年が進む中で、主免許である幼稚園教諭一種免許状の取得のみを目指す学生と、副免許で小学校教諭一種免許状の取得を目指す学生では保育者に対する意識も異なってくると考えられる。また、「人間教育実践力開発演習Ⅰ」のように1年次からも専修横断的な専門科目の中で、他の学校段階についての学びを深めていくことも、小学校教育やその後のつながりを踏まえた一貫した見通しを持つ高い資質を持った保育者の育成として有意義ではないだろうか。保育者としても教育者としてもよりよい学生の養成を目指して分析を続けたいと考える。

V. おわりに

本研究では、新入生が思う「保育者として必要な力」や保育者の適性とと言われる資質について、自身がどれを最も重要だと思い、また現時点でどの資質を身につけていると思うかについて分析を行った。その結果、学生らは「コミュニケーション能力」「子どもを理解すること」「何事にも一生懸命であること」「笑顔」が保育者として必要であるとしていた。また、これらを含む保育者適性については「論理的思考性」や「行動力」よりも「養育性」「共感性」を重視する者が多かった。自分に身につけているとするものは「共感性」「気配り」とする者が多く、「論理的思考性」「養育性」とする者は少なかった。今後は、これらの入学当初の学生の持つ保育者意識がどのように変化していくのか、また必要とされる様々な資質をいかに身につけて教育実習や専門職の就職へと繋げていけばよいのか、検討を続けていきたい。

引用文献

- 1) 林悠子・森本美佐・東村知子 (2012) 保育者養成校に求められる学生の資質について—保育現場へのアンケート調査より—。奈良文化女子短期大学紀要, 43: 127-134.
- 2) 森本美佐・林悠子 (2014) 保育者養成校に求められる学生の保育実践能力と資質について。奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要, 45: 123-130.
- 3) 林悠子・森本美佐・東村知子・高橋千香子 (2015) 保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識

- について、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要, 46:91-100.
- 4) 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領.
 - 5) 文部科学省(2018) 学習指導要領.
 - 6) 青戸泰子・田邊資章・山田麻美(2018) 保育・教育者の資質に関する一研究:保育・教育者適性尺度の検討-. 関東学院大学人間環境学会紀要, 29:9-18.
 - 7) 藤村和久(2010) 保育士, 幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9:129-143.
 - 8) 浅井拓久也(2018) 専門職としての保育士像の形成に関する研究-保育所実習前後における保育士像の変化に着目して-. 秋草学園短期大学紀要, 35:14-28.